

「濠から少しづつ兵を繰り出し、大仏坂から鎌倉へ繰り出すべし。城を囲む上杉勢に気取られぬよう、矢を放ち、関を挙げさせよ」

舌打ちしながら、北条氏時は矢継ぎ早に采配した。

里見勢は馬借や寺領を襲撃し、馬を確保すると、元八幡方面と由比ヶ浜方面に別れて焼き討ちを開始した。正木通綱は由比ヶ浜方面の采配を請け負った。

「殿、騎乗召され」

実堯から手綱を渡され、義豊は躊躇した。困惑して、傍らの中里源太左衛門と本間八右衛門をみた。

「殿の本陣をこの場にして、ここから動かぬことがよいと思う」

本間八右衛門の言葉に、正気かと、実堯は笑った。

「ふたりだけで殿を守れるのか。扇谷上杉勢は玉繩を包囲しているが、必ず敵は軍勢を繰り出してくるぞ」

「殿を無理矢理と神仏の科人とするは、なんとしたことか」

今度は中里源太左衛門が差し挟んだ。

「神罰があるならば、鎌倉を奪いし北条にこそこれあり。迷信如きに狼狽えては、神罰の前に雑兵に討たれてしまふ」

理屈はわかる。

「よい。僕は叔父上に従おう」

義豊はゆつくりと騎乗した。

里見勢は元八幡を経て、本覚寺で滑川を越えて、二の鳥居がみえる辺りで若宮大路に入った。そして、随所に火を放ちながら、鶴岡八幡宮へと迫った。

「左衛門佐殿。北条の兵が鎌倉に駐留しております。ここは一旦、正木勢と合したら如何」

酒井左衛門佐定治が実堯に注進した。

確かに鎌倉には、伊勢宗瑞の代より〈鎌倉代官〉を称する大道寺盛昌が治安維持程度の兵を常駐させていた。しかし、それは軍勢とよぶには、余りにも少ない。

「構わぬ。我らに勢いがある。そのような敵は、蹴散らしてしまえ」

確かに、勢いは里見勢にあった。

如何なる寺社も厭わず火攻めにする悪鬼の如き進撃に、寡兵の大道寺勢は支えきることが出来ない。その兵火は、躊躇いもなく、鶴岡八幡宮をも呑み込んでいった。朱塗りの社殿の随所に、黒煙が立ち上り火炎が舐めていく。逃げまどう人々のなかには、火を消そうと踏み留まる者さえない。

右往左往、里見勢だけが明確な意思を以て、玉繩を目指し、いよいよ進撃していった。

大道寺勢は軍勢の数に圧されて、やがて玉繩城へと退却を決意した。

「背後より敵影」

大仏坂を越えて鎌倉入りした玉繩の軍勢が姿を現した。地の利に聡い玉繩勢を迎え討っては、時間の浪費になる。実堯は鶴岡八幡宮を焼き討ちした足で、そのまま一気に、巨福呂坂から玉繩城へ攻めかけるよう下知を飛ばした。

「無茶だ！」

本間八右衛門が叫んだ。

「背後の敵は正木大膳が請け負うものなり。当方は気兼ね無用」

鶴岡八幡宮二五坊のひとつ相承院より鶴岡八幡宮の供僧となる供僧・快元は、かかる兵火の有様を

「仏罰これあるべし」

と、憎悪のまなざしで里見勢を睨んでいた。

後年、その著書『快元僧都記』において、相承院快元は里見義豊と実堯に対して、感情を込めた厳しい記述を残している。これは、北条氏に寄った立場ゆえ、当然の偏向もあるうが、当時の戦乱の証言として生々しい。

里見勢は大道寺盛昌を追撃し、いよいよ玉繩城へと迫った。

玉繩を囲む扇谷上杉勢は、これのみを

「援軍きたり」

と狂喜した。それによって上杉勢は士気を高揚し、より激しく玉繩城を攻め立てた。

北条氏は柏尾川に軍勢を繰り出すと、里見勢を迎え撃ちながら、後退する大道寺盛昌を収容した。

この激突で、双方とも多くの死者が出た。玉繩城側からは、勇猛果敢に挑んだ甘糟勢等兵三〇数騎が里見勢によって討ち果たされた。無論、里見勢とて、大勢の兵が討ち死にした。大道寺盛昌は辛くも城内へ難を逃れた。

この大道寺盛昌、伊勢宗瑞とともに国盗へ参じた御由緒六家のひとりであり、北条氏でも家格の重い人物である。この者を死なさなかつただけでも、氏は安堵した程である。

頃合いをみて里見勢は退いたが、依然包囲する上杉勢を警戒して、北条氏はこれを追撃することができなかった。

「里見の手により、鎌倉は焼失して候」

大道寺盛昌の報せに憤りを感じながらも

「焼けたら再建すればよい。いまは目障りな上杉勢を撃退するのみである」

氏は静かな怒りのすべてを、扇谷上杉朝興に向けた。

籠城の功が奏したのだろうか。この包囲はやがて解けて、上杉勢は河越城へと退いていった。

大仏坂より攻め込んだ玉繩勢を駆逐した正木通綱と合流した里見勢は、肃々と、和賀江島へと撤収を開始した。

「在地豪族のこと、無視できぬ実力が身に染み  
た」

燃える鎌倉を洋上から眺めながら、里見義豊は低く呻いた。

無視の出来ない強さを、義豊は別の考えに置き換えた。義豊を遮る実堯と正木通綱、この二人が今回の首魁と称して違いない。これの意に従い水軍が動き、兵馬が戦果を挙げた。

在地を廃するためには、この二人こそ障害だ。義豊はこのことを胸の奥にしまいこんで、誰にも語ることはなかった。

この戦さのち、北条氏時より里見義豊へ御級交換の申し入れがあった。里見勢の討ち死にした兵も少なくない。

「このこと、叔父上にお任せする」  
御級交換は実堯の采配で、その後、つつがなく執り行われた。

この戦いは北条側に里見氏の実力を強く与えることとなった。

と同時に、里見義豊自身は叔父の底力と在地豪族の恐ろしさを刻み込むとともに、あらたに芽生えた〈ある意思〉を噛み締めたのである。

十十十

鎌倉炎上(4)

夢酔 藤山